

第4回 日本謄写藝術院の 11年間

宮川良を中心とした 謄写印刷芸術家集団

戦 前の技術的中心となった「堀井謄写堂」「昭和謄写堂」と並んで「日本謄写藝術院（以下、藝術院）」の活動を忘れてはなりません。藝術院は昭和6年（1931）に宮川良によって設立され、草間京平（佐川義高）や芥川清巳・久保哲等を主要技術スタッフとして、新聞「謄写研究」を定期的に発行しました。設立から数年間、新聞の別冊付録という形で、色刷りの「美術謄写印刷集」を刊行・頒布しましたが、これには滋賀県の岩根豊秀（吉太郎）や山形県の鈴木藤吉ら、地方の優秀な謄写印刷人たちが制作した作品も集められ、全国的な活動となりました。

教則本やカット集も数多く出版されました。草間京平や岩根豊秀らの作品には、彼らの技術レベルの高さ・作品の素晴らしさを感じます。これらが昭和初期に鉄筆・ヤスリ等のガリ版道具によって作られたのは驚きであり、全国の名人たちが競って作品を制作し、その中心にいたのが草間京平でした。

昭和7年（1932）8月15日から21日まで「総合美術謄写印刷講習会」が開催されました。これは戦前における謄写印刷講習会の大きな講習会の一つで、草間

京平（表記は佐川義高）や芥川清巳、久保哲、有村博行等が教壇に立ちました。このために作られたポスターは書体・内容とも優れており、これ一つだけみても宮川良を中心とした藝術院メンバーの意気込みが伝わってきます。講義内容が詳しく載っているテキストも現存しており、いかに高度な内容だったかがうかがえます。

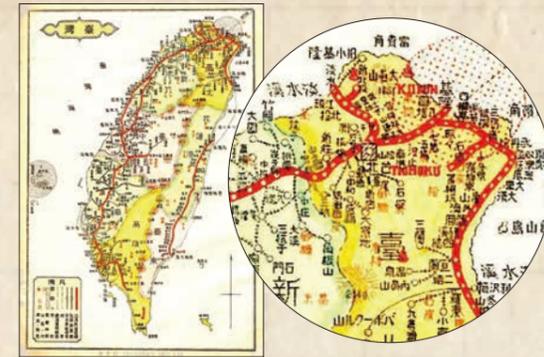
昭和7年というと5.15事件がおり、政党中心政治が終焉を迎え、軍部による圧力がだんだんと強くなっていく時期であり、日華事変を経て第二次世界大戦・太平洋戦争へと時代が変わると、謄写技術普及を主眼としながらも、一方では贅沢な芸術作品を作る事を目的とした活動が、豪華を嫌う戦時体制に迎合する事はできませんでした。昭和17年（1942）、藝術院は軍部の圧力によってその活動を停止しました。代表の宮川良とともに主要メンバーであった久保哲が昭和19年（1944）に病没したこともあり、戦後、藝術院が再興する事は無く、宮川良も謄写印刷史から姿を消してしまいました。

藝 術院制作の数ある教則本の中で最も代表的なものは、昭和8年（1933）に芥川清巳が著作・制作した「ゴシック書体の製版と印刷」であり、表紙は草間京平が制作協力しました。その他、みちのくの謄写印刷名人、鈴木藤吉が昭和10年頃に制作した「最新カット集」や「謄写研究別冊・色刷り作品集」もありますが、詳細は本連載第10回に改めて紹介します。

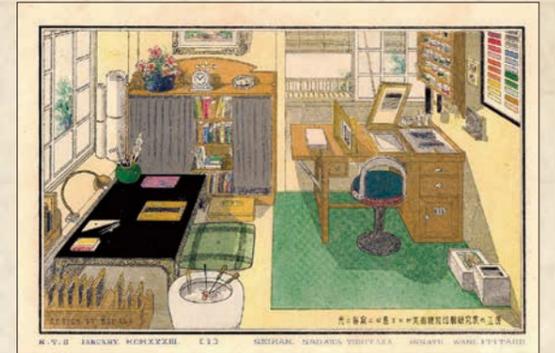
昭和10年から15年にかけては、様々な研究機関や堀井謄写堂をはじめとするメーカー・販売店において、教則本や色刷り印刷見本・講習会用印刷物が制作されました。「堀井謄写堂講習会講義要項」（昭和14年、草間京平作）、「謄写印刷の精華」（昭和12年、草間京平作）、「太平洋全図」（昭和12年、草間京平作）、「小倉百人一首」（昭和8年頃、友野康夫作）などは、教材という名の芸術作品といえますが、詳細は次回以降に紹介します。

昭和15年（1940）に堀井謄写堂が紀元2600年を記念して制作した印刷物があります。手のこんだ多色刷り謄写印刷物を制作した最後の時期にあたり、草間京平か草間の周りにいた謄写印刷プロの人達が制作したと想像されます。

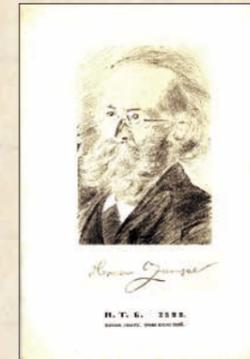
講習会や教則見本という形を通じて名手たちが技術向上を図り、大きな成果を得た時代の最後の輝きであったといえましょう。これらの芸術作品は1941年（昭和16）以降影をひそめ、日本謄写藝術院は終焉を迎えるのでした。



草間京平（佐川義高）作
台湾地図（円内拡大図）



草間京平作「光と静寂とに恵まれた美術謄写印刷研究家の工房」



岩根豊秀（吉太郎）の作品



婦人画 / 作者不明



総合美術謄写印刷講習会のポスター



芥川清巳作「ゴシック書体の製版と印刷」表紙と本文（円内拡大図）



ゴシック書体
◆ 鐘漢と鐵筆
◆ 尖と鐘溝の調和



草間京平（中央）と仲間達
講習会のポスターが後ろに見える



奉祝紀元二千六百年
（昭和15年、堀井謄写版印刷）



藝術院によって昭和6年に創刊された新聞「謄写研究」



同年12月の別冊付録「美術謄写印刷集」



藝術院の代表・宮川良の手になる昭和7年申年の年賀状